



全国日豪協会連合会神戸大会  
The National Conference  
of  
National Federation Japan Australia  
Societies in Kobe

2012年11月24日 (土)  
於：ANAクラウンプラザ神戸



Kobe Japan Australia Society  
神戸日豪協会



## 目次

	頁
全国日豪協会連合会総会・神戸大会 神戸日豪協会創立40周年記念パーティー概要	4
会長あいさつ	6
お祝いメッセージ	8
記念シンポジウム基調講演 「虎穴に入らずんば虎子を得ず ～Nothing Ventured, Nothing Gained～」 ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使	10
「虎穴に入らずんば虎子を得ず ～Nothing Ventured, Nothing Gained～」 パネルディスカッション	15
懇親会・パーティー式次第	26
会員からのお祝いメール紹介	30
神戸日豪協会40年のあゆみ	32
創立40周年記念大会を終えて 神戸日豪協会副会長・創立40周年記念大会実行委員長 日下 徳一	34
神戸日豪協会創立40周年記念大会役員	35

「全国日豪協会連合会総会・神戸大会」

「神戸日豪協会創立 40 周年記念パーティー」

概要

- 主催：NPO 法人神戸日豪協会
- 共催：全国日豪協会連合会
- 助成：公益財団法人神戸国際協力交流センター
- 後援：オーストラリア大使館  
兵庫県  
公益財団法人兵庫県国際交流会  
神戸市  
公益財団法人神戸国際協力交流センター
- 協賛：オーストラリア大使館  
豪日交流基金
- 特別協賛（順不同）：  
ウェスティンホテル淡路  
オリバーソース株式会社  
株式会社ハークスレイ  
株式会社ヴァイアンドカンパニー  
三和実業株式会社  
株式会社 神戸風月堂  
株式会社 Poko  
高嶋酒類食品会社  
白鶴酒造株式会社  
六甲バター株式会社  
エレコム株式会社  
ホテル・ラ・スイート神戸ハーバーランド  
田嶋株式会社

●日程：2012年11月24日（土）

全国日豪協会連合会・理事会 14：00-15：00

全国日豪協会連合会総会 15：00-16：30

記念シンポジウム 16：45-18：15

懇親会・神戸日豪協会創立40周年パーティ 18：30-20：30

●会場：ANAクラウンプラザ神戸

神戸市中央区北野町1-1 (078) 291-1121 代表

●来賓：ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使

クリストファー・リース在大阪オーストラリア総領事

●出席協会：公益社団法人日豪ニュージージーランド協会

富山日豪ニュージージーランド協会

岐阜日豪協会

飛騨高山日豪協会

静岡県日本オーストラリア協会

名古屋日豪ニュージージーランド協会

三重オーストラリア・ニュージージーランド協会

京都日本オーストラリア協会

関西日豪協会

大阪日豪協会

南大阪日本オーストラリア協会

長崎日豪協会

福岡日豪協会

NPO 法人神戸日豪協会

以上

## ごあいさつ

神戸日豪協会はことし創立40周年を迎えました。誠に意義深いことであります。創立当時から今日に至るまで、ご尽力くださった会員の皆様、歴代の会長や役員の皆様に心からの敬意を表しますとともに厚く御礼申し上げます。

当協会は本年1月に神戸日豪協会創立の母である古澤峰子先生を偲ぶ会に始まり、本日は全国日豪協連合会のホスト役を務め、かつ当協会創立40周年の記念式典を開催の運びとなりました。私ども神戸日豪協会は草の根レベルで人的交流の輪を大切に広げつつ、日豪友好の歴史を重ね、交流を深めてまいりました。創立当初のクィーンズランド州ブリスベン市の皆様とのご縁が、今では豪州ほぼ全土の方々と繋がりを持たせていただけるようになりました。先月末、ギラード豪首相が「アジアの世紀におけるオーストラリア白書」を発表されました。その数ヶ月前に白書作成のためのヒアリングが豪大使館にて行われましたが、その際に私は日豪交流 NPO 団体の一員として、今後両国における教育交流がより重要となる点について述べさせていただきました。

今回の白書には日本・中国・インドネシア・インドの4カ国の言語を「優先アジア言語」として豪全土の小学校から高校での学習の機会が提供される旨が盛り込まれております。当協会が推進してきた様々な人的交流プログラムの中でも日本語補助教員派遣プログラムは本年で38年目を迎え、このプログラムを通じて日本語をそして日本を教えることに携わってきた者はまもなく150名を超えようとしております。毎年の帰国報告会では、その貴重な体験により、母国である日本をもっと深く知りたい、そして大切にしたいと思うようになったという感想を耳に致します。このようなプログラムを中心として、40年前に古澤先生達が夢見た「日豪の心の架け橋」となるよう、今後も実りある活動を展開してまいる所存です。皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。

NPO 法人神戸日豪協会会長 太田 敏一

The Kobe Japan-Australia Society is celebrating the 40th anniversary of its establishment – a truly significant milestone. In honour of all our hard-working members and successive past Presidents who have served us from the day of its establishment until today, I would like to express my sincere appreciation.

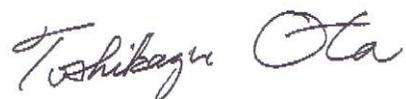
Commencing with the Memorial Ceremony held on January 28th this year in honour of Ms. Mineko Furusawa, the founder and inspiration behind our society, through to acting as host society of the 2012 National Federation of Japan Australia Societies General Conference, we welcome you to the 40th Anniversary Reception.

We at the Kobe Japan-Australia Society value the ongoing expansion of our person to person exchanges at the grass roots level, and have contributed overall to the depth of the history and exchange of the Japan-Australia friendship. Commencing with a connection to the people of Brisbane City, Queensland, we now have links to almost the entire nation.

Just last month, Australia's Prime Minister Julia Gillard launched the "Australia in the Asian Century White Paper". A few months before this, as part of the drafting process, a pre-launch discussion session was held at the Australian Embassy in Tokyo and at that time, as a member of an NPO Japan Australia organization, I was given the opportunity to make a point about the importance of increasing educational exchange programs between Japan and Australia. Included in this White Paper is the provision of study opportunities for national students from primary school to high school, to study four priority Asian languages: Japanese, Chinese, Indonesian and Hindi.

Of the various exchange programs our organization has promoted, our Japanese Language Assistant Teacher Program will enter its 38th year this year. The number of people who have been connected with teaching both Japanese language and about Japan in Australia through this program will soon reach 150. Based on those practical work experiences, every year when participants report back upon their return to Japan, I hear that they now want to learn more deeply about their own country and have grown to think lovingly about Japan. We feel that at the fundamental core of programs such as this, is the on-going development of productive person to person exchanges. We ask all of you to cooperate with us in this endeavour.

Toshikazu Ota



## お祝いメッセージ



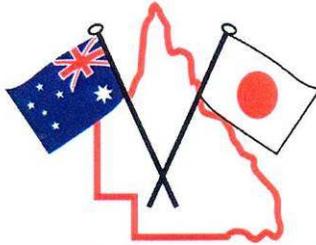
### 兵庫県知事 井戸 敏三

神戸日豪協会が創立40周年を迎えられました。心からお祝いします。1981年の創立以来、毎月開催するワトルの会をはじめ、日本語補助教員派遣プログラムや交換留学プログラムの実施など、意欲的な活動を展開してこられました。長年にわたるご尽力に改めて感謝します。兵庫県と西オーストラリア州の友好交流も、皆様のご支援ご協力のもと確かな成果を上げてきました。友好訪問団の相互派遣や両県州事務所の相互設置をはじめ、大学間の学術交流、鉄鉱石・LNG等の資源取引など、幅広い分野で交流が進んでいます。昨年は姉妹提携30周年を祝して、新たにコアラを4頭寄贈いただくとともに、本県からも淡路瓦を活用したモニュメントの贈呈を表明し、現在準備を進めています。さらに、両県州の大会にランナーを派遣し合うマラソン交流も始まっています。異なる歴史や文化、産業をもった地域の交流から、新時代を拓く活力が生まれます。とりわけ、日本とオーストラリアは、アジア太平洋地域におけるかけがえのないパートナーです。神戸日豪協会の皆様には、これからも日豪両国の架け橋として充実した活動を展開されることを期待しています。神戸日豪協会の今後ますますのご発展と、皆様のご健勝でのご活躍を心からお祈りします。



### 神戸市長 矢田 立郎

神戸日豪協会の創立40周年、心よりお祝い申し上げます。神戸市とブリスベン市は1985年に姉妹都市提携を行いました。この提携の礎となったのは、故古澤峰子先生や貴協会の熱意ある日豪間の国際交流活動でした。これまでに、両市の姉妹都市交流は、文化・経済交流や中高生の相互訪問、動物交換など、幅広い分野で実施されています。今後も両市の交流が進展すること、そして、貴協会の益々のご発展と、太田会長をはじめ会員の皆様方のご健勝を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



## Australia Japan Society – Queensland Inc.

ABN 73 204 906 231

Dear President Ota-san,

To the Kobe Japan-Australia Society and all of its members, both past and present, on the occasion of your 40th anniversary - *40 shunen omedeto gozaimasu.*

It is with great pleasure that I am able to write to you and your members on attaining this significant milestone. On behalf of the Australia-Japan Society (Queensland) Inc. and all of its members may I wish you all the very best on this occasion.

It may be of interest to your members to note that the Australia-Japan Society (Queensland) shares the same anniversary as your Society. Our Society is also celebrating its 40th anniversary this year. This too is a milestone that we are proud of, and which represents 40 years of dedication by a number of hard-working people, both Australian and Japanese, collaborating together for a common and well-meaning purpose - to promote a common interest and mutual understanding between Australia and Japan in order to create a bridge between our two countries.

We are pleased to say that this common purpose remains strong in our organisation, and I am also pleased to have visited Kobe in May and October this year to see that this common purpose remains strong in the Kobe Japan-Australia Society. Our two Societies have an existing and warm relationship and we look forward to continuing to jointly develop and strengthen that relationship in future years.

On this occasion may I reinforce an open and warm welcome to any of your members should they find themselves in Brisbane.

Congratulations on your 40th anniversary, and we hope you celebrate this milestone in true Australian and Japanese spirit.

All our best,

Andrew Hay  
President, Australia-Japan Society (Queensland) Inc.



写真) 互いの40周年を祝いあう  
クィーンズランド州豪日協会  
アンドリュー・ヘイ会長と  
神戸日豪協会太田会長

## 「虎穴に入らずんば虎子を得ず」

～Nothing Ventured, Nothing Gained～

### 基調講演

ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使



本日は全国日豪協会連合会・神戸大会、および神戸日豪協会創立40周年記念シンポジウムにお招きいただきありがとうございます。この記念すべき会で、基調講演やパネリストとして皆様と意見交換する機会をいただきましたことを大変嬉しく思います。

このあと、私を含めた計6人のパネリストとともに「虎穴に入らずんば虎子を得ず！」をテーマに、最近の若者の動向、教育問題、国際競争力など、現代の社会が抱える問題について議論させていただきますが、まずはパネルディスカッションのプロローグ（序章）として最新のオーストラリアの試み

をご紹介します。ご紹介させていただきたいと思っております。

本日お集まりの皆様は、オーストラリアの政策や国際社会の立場について、よくご存知の方も多いと存じますが、先月28日にジュリア・ギラード首相が「アジアの世紀におけるオーストラリア」と題した白書を発表しました。

今回の白書が作成された背景には、20世紀末から始まった世界各地での新興国の台頭があります。目覚ましい経済発展を遂げた中国・インド・ブラジルなどの出現によって、これまでのいわゆるG7という経済の重心が、新興国を加えたバランスへと急速に移っていったのです。その中で、かつて世界第二位の経済大国であった日本も、絶対的な強い地位から、相対的な優勢を保持しようとしています。特に新興国の中でも、中国、インド、そしてインドネシアの存在感が大きいため、21世紀はアジアの世紀と言ってもいいのではないのでしょうか。

もちろん、この新しいアジアの世紀の全体像がまだはっきりと輪郭を成しているわけではありませんが、少なくとも今後数十年で予測されるアジアの成長には世界の全体像を変える力があることは明白です。そして、この後で議論されるテーマを考えると、この世界情勢の変化と、そこから生まれる機会を考慮する必要があると思います。そこで、これからギラード首相が発表した白書とその背景の概要をご紹介します。そこに謳われているわが国のアジア地域との関係強化の方針についてお話ししていきたいと思っております。

まずは歴史的なアジアの急成長を考えてみましょう。その中心に立つのは他ならぬ日本です。日本のGDPは1953年から1965年の間に平均で毎年9%以上の伸びを記録しました。これは現在の中国の経済成長率とほぼ一緒です。日本はその後、何十年

にもわたって地域経済の成長エンジンの役割を果たして来ました。

そして、今もなお経済大国の一角を占めています。日本の好景気は 50 年代当初からオーストラリアに機会をもたらし、1966 年には日本がわが国の最大輸出市場となりました。そしてその状況はその後 40 年ほど続きました。周知のように、日本はやがてその地位を中国に譲ることになりますが、戦後から現在に至るまで、一貫してアジアの経済的発展がわが国に成長の機会をもたらしてきたのです。そして新しい「アジアの世紀」を迎えようとしている今、これまで以上のチャンスが待ち受けています。世界で最も人口が多い地域は既にアジアとなっています。2050 年までにこの地域で 30 億人が中産階級の仲間入りをするであろうという試算もあります。アジアは世界最大のモノとサービスの生産拠点になるだけでなく世界最大の消費市場へ変貌を遂げていくのです。

では次に「アジアの世紀」を迎えるに当たり、わが国が成功し、繁栄を続けていくための施策を考えてみたいと思います。

白書ではわが国が「アジアの世紀」において成功を意味するための 5 つの行動目標が記されています。まず一点目は「経済の強化」です。わが国の持つ強みを活かし、生産的で開かれた、回復力の高い経済の実現に向け、社会や経済の基盤を強化する必要がありますと述べられています。このためには 5 つの主要分野——職業技術および教育、技術革新、インフラ整備、税制そして規制を改革し、投資を継続していくことが必要です。

二点目は「能力の構築」が挙げられています。生産性を向上させるために、教育や職業技術の分野で人材投資をし、あらゆる国民が「アジアの世紀」に参加し、貢献できるよう促す必要があります。

三点目は、「成長市場との結びつき」です。革新性と競争力を持つオーストラリアの企業や組織が、地域における最大限の成功を収めるには、アジア地域におけるパートナーシップの構築が重要です。政府はこのために地域の開放性を高めるとともに、市場の統合を推進し、貿易や投資、パートナーシップの推進を促そうとしています。

四点目は持続可能な安全保障の確保です。オーストラリアの未来はこの多様性に富んだアジア地域の繁栄や安全に大きく関わっているという点です。この点に関し、わが国は二カ国間で、あるいは既存の地域体制、組織を通じ、信頼や協力関係の構築に努めていきたいと考えています。また、ルールに基づいた地域・世界秩序の中で、アジアの国々がより大きな役割を務めるよう支援を続けていきます。またアメリカとの同盟関係や、中国の地域への建設的な関与も安全・安定を実現する上では不可欠です。

最後、五点目は「より深く、広い関係の構築」です。わが国はあらゆるレベルでアジア地域と深く幅広い関係を作るよう努めるべきだと述べられています。

以上、白書の概要と背景を、短い時間ではありますがご紹介させていただきました。

ここで最後の 5 点目にとりあげた「より深く広い関係を構築する」ことについて少し掘り下げて見ていきたいと思えます。冒頭に申し上げましたがこれからお話をさせていただくことは、この後のパネルディスカッションのヒントになるのでは？と特に感じている点です。

我が国のアジアとの関係を考えるとき、外交や経済と同様の重要性の割合を、社会的、文化的関係が占めていると白書では述べられています。私はこの最も適切な事例は日

豪関係であると思います。実際に白書では、我が国と日本の関係は他の近隣諸国との関係の構築と、その発展においてモデルケースとなると述べられています。日豪には草の根レベルの交流が深く浸透しています。両国間の自治体における姉妹提携の数は106にのぼります。本日お集まりの皆さんの活動は全国で盛んに行われています。これは我が国でも同様です。

2011年に行われた国勢調査によると我が国には5万人の日本人が暮らしています。日本で最初のワーキングホリディ制度が導入された1980年以来、多くのオーストラリア人と日本人はお互いの国の社会の中で生活をし、就労する機会が増えました。教育の分野でも何万人という学生が交換留学生制度や学生ビザを利用して毎年お互いの国を行き来しています。本日お集まりの皆さんの中にもこのような機会を利用して渡豪した方もいらっしゃると思います。

1901年にオーストラリアで連邦制が採用されてからも、我が国の国民は多くの点で自分たちの精神は遠く離れたヨーロッパにつながっていると考えるのが主流でした。第二次世界大戦後、はじめて我が国のそうした関心はアメリカや、より地理的に近い国々に向けられるようになったのです。ことわざでいうように、「遠くの親戚より近くの他人」に目覚めた我が国はお隣に巡らされていた高い塀をとりのぞき、地域とともに繁栄を享受する国家へと発展をとげたのです。そして近くの他人であった人は今、「良き友人」であり、また「近くの親戚」でさえあります。我が国の変化の過程で中心的役割を果たしてきたのが日本でした。日豪関係は終戦をへて1950年代に修復されましたが、この動きを後押ししたのが1957年に調印された「日豪通商協定」でした。この協定を通じ、我が国はアジアの主要な資源供給国としての地位を確立し、アジア外交への関心を一気に高めていったのです。

「アジアの世紀におけるオーストラリア白書」ではオーストラリアの外交において、さらにアジアの重要性を高めるよう政府に提言がされています。しかし勿論、ただ外交分野でアジアに比重をおくだけでは充分ではありません。我が国が「アジアの世紀」で成功するには、国民が必要な技術や知識を備えていることが重要です。そのため白書では特に教育分野に重点がおかれ、オーストラリアの学生がアジアにより深く精通し、アジアの言語能力を十分に向上できるよう目指しています。

「アジアの世紀」において我が国が成功をおさめるためには、すべてのオーストラリア学生が近隣アジア諸国の文化や歴史、言語について理解を深める必要があります。

白書が実行されればカリキュラム全体で多文化への理解に更に重点がおかれ、学生たちが日本や他のアジアの国について学ぶ機会が大幅に増えるでしょう。学校教育においてもオーストラリアの子どもたちは小学校にはいった一日目から高校卒業までアジアの言語について学ぶ機会が与えられることとなります。

優先して学ぶ言語として指定されているのは、日本語、中国語、ヒンディー語、インドネシア語の四言語です。オーストラリアの学生が外国語を学ばない現状を好ましくは思っていないですが、それでも日本語は我が国の学校や大学で今でももっともひろく学ばれている外国語となっています。白書をうけ、学校での日本語教育支援のためにさらに日本語の新しいカリキュラムが策定されるでしょう。

白書では学校間の交流にも力をいれており、すべての学校が、日本や他のアジアの

国にある、少なくともひとつの学校と交流関係を持つよう呼びかけています。この点でも日豪両国には既に650を超える姉妹校提携が存在しており、十分に進んだ状況にあります。また成長の可能性が、あります。

白書はまた大学教育にも焦点をあてています。日本や他のアジア人学生がオーストラリアに留学するようになってから長いこと経ちますが、こうした留学は両方向において行われるべきだと考えます。我が国の次世代リーダーはアジアについての造詣が深くなくてはなりません。そのためには直接アジアの地に足を運び、体験するのが一番です。白書のひとつの目玉として、オーストラリア政府はこれを奨励すべく、あらたに「アジア留学交付金プログラム」の設立を決定しました。今後5年間で日本を含むアジア諸国へ留学する一万名以上のオーストラリア人学生に対し、奨学金が支給されます。また留学を志す学生に向け、奨学金貸付事業もより充実されます。

日豪の大学間には既に様々な交換プログラムが締結されていますが、新しい奨学金プログラムを整備することで、多くのオーストラリア人学生が既存のプログラムを活用することができるかとオーストラリア政府は考えています。

「アジアの世紀」は学生たちに数多くの機会を提供するものでもあります。こうした取り組みや支援策に、私は個人的に強く賛同しています。

ご周知の方々も多いとは存じますが、私はかつて国際交流基金による2週間のプログラムを利用し、初めて日本を、そして神戸の地を訪れました。

その際、故古澤峯子先生との出会いがご縁となり、神戸日豪協会の皆様との末永いお付き合いが始まったわけです。当時、私は高校の最終学年で17歳でした。それからシドニー大学で日本語や日本文学、歴史について学び、3年後、再び神戸に戻りました。この後のディスカッションに特別ゲストスピーカーとしてご参加される松井先生は、私のシドニー大学時代の恩師です。こうした若い頃の経験は、私の人生とキャリアの両方に計り知れない影響を与え、現在の私の礎となっているといっても過言ではありません。私はこのような自身の経験からも、多くのオーストラリア人に同じような機会を持って欲しいと切に願っています。わが国が地域に統合することで、経済や他の分野でより多くを得るといことも勿論重要なことですが、この留学、アジア体験の強化という点だけでも、私は白書の目指す方向に強く賛同しています。

白書は、高い理念を目指しています。そして、そのために社会全体を網羅した、野心的な目標を打ち出しています。この理念を実現させるためには政府だけでなく、企業や大学、文化機関、学校、組合、地域団体といった様々な組織による努力が欠かせません。この試みが成功すれば、オーストラリアは今以上にアジアの一員となることでしょう。日豪の友好関係も今以上に強化されていくことでしょう。

さて、今までお話をさせていただいた、白書の提言する高い理念や、その政策が、この後のパネルディスカッションのテーマである、現代または次世代の日本の若者を考えるとき、どう結びつくのか、最後に触れておきたいと思います。

「アジアの世紀」は何もオーストラリアだけの課題ではありません。アジア太平洋地域の国々、ひいては世界全体の課題です。そして、わが国同様、またそれ以上に日本に様々な変化と機会を与えます。新しい「アジアの世紀」の幕開けを迎えるにあたり、経済大国である日本は、アジアのリーダーとして、この変化を真摯に受け止め、機会を掴んでいく必要があります。その中核を担っていくのが若い世代、次世代の方々で

す。わが国の友人である日本が、今以上に世界に開かれた姿勢を保ち、これからの世代のグローバルな人材として育成できるかどうかに、日本の未来は左右されていくでしょう。

昨今、日本の自治体、教育機関、企業は「グローバル人材」育成のため、様々な取り組みを実施しています。この後のディスカッションの中でも、様々な見解が話されると思いますが、「内向き志向」とよく表現される、若い世代を抱える日本社会は、新しい局面を迎えているのかも知れません。

文部科学省の集計によると、海外留学生は2004年の8万2,945人をピークに減り続け、現在はその7割に落ち込み、6万人をきっているようです。オーストラリアに特化して申し上げると、日本人留学生の数はピークから平均で毎年10%減少し、2011年に学生ビザで大学機関に正規留学している日本人学生は1万1,031人（この統計はワーキングホリディなどで英語習得のための留学者1万5,226人は含まない）となります。

外の世界に興味を持ってない若者が増加しているといわれる一方で、日本企業グローバル人材の需要は増大しています。しかしながら、私はこの減少に危惧を覚えると同時に、若い世代の可能性を信じたいと思っています。

この後のパネルディスカッションの場で、様々な意見交換が行なわれると思いますので、また後ほど、更にお話させていただきたいと存じます。ご静聴ありがとうございました。

## プロフィール

ブルース・ミラー

### 駐日オーストラリア大使

2011年8月16日東京に着任し、同年10月6日に信任状を奉呈して正式に駐日オーストラリア大使に就任した。

同氏はそれまで国際政治経済、及び安全保障における首相直属の情報評価機関である内閣調査庁（ONA）に副長官として奉職していたが、政府内での経歴の大半は外務貿易省（DFAT）においてのものである。対東アジア関係の課題や地域安全保障問題のみならず、世界規模の枠組みといった外交政策に豊かな経験と見識を持つ。特に日本の事情には詳しい。

1986年に外務貿易省に入省後、在日オーストラリア大使館政務担当公使（2004-08）、北東アジア部部長（2003-04）、戦略政策部部長（2001-02）、アジア太平洋安全保障課課長（1999-2000）、首相内閣省防衛情報部、シニアアドバイザー（1997-98）、在日オーストラリア大使館一等書記官（後に参事官へ昇進）（1992-96）、海洋法政策課課長代理（1992）、法務部エグゼクティブ・オフィサー（1989-92）、在テヘラン・オーストラリア大使館三等書記官（1987-89）等の役職に就いてきた。

シドニー出身。シドニー大学卒業（人文学士・日本語学日本文学歴史と法学士取得）。日本語を話す。趣味は芸術や文学、ハイキング。

1982年、関西学院大学留学時には「太田家」に5ヶ月間ホームステイ。

## ▼パネラー・プロフィール



左から太田会長、和田氏、青木氏、鳴神氏

### 太田敏一

1959年生まれ。名古屋出身

関西学院大学経済学部在学中に神戸日豪協会入会、豪州留学生のホストファミリーを3年間引き受ける（その中にミラー大使も！）。

ブリズベンプロジェクト・メンバーとしてカウラを表敬訪問。

1983-85年 豪州ジーロング・グラマー・スクール、ティンバートップ校にて日本語教師、野外教育全般に関わる。

1986-90年 国連英検教材開発、及び甲南学園海外教育事業に携わった後、NZ初の全寮制私立大学インターナショナル・パシフィック・カレッジ立ち上げスタッフを経験、父急逝のため家業の太田運送株式会社を継承

1999年 大阪西南ロータリークラブ入会、主に国際社会奉仕活動、青少年交換プログラムに関わり、今日に至る。

2011年 神戸日豪協会会長就任

### 青木洋一

1951年生まれ。大阪出身

1975-78年 大学卒業後、(株)大丸に勤務

1978年 南山大学外国語学部イスパニア語学科に入学

1981年 神戸市教育委員会勤務

1986-87年 交換教師として米国シアトル市の公立中学・高校に勤務

1992年 神戸市立葺合高校勤務

国際交流担当として日本から海外へ行く生徒や、来日する留学生の世話を中心として行ってきた。

## 和田直子

1974 年生まれ。 広島出身。 中学卒業後から米国へ 7 年半単身で高校・大学留学。 帰国後、国内重機メーカーや外資系製薬会社の通訳・翻訳を経験後、ニュージーランドの大学に再留学し、卒業後に現地コンサルティング会社で日本からの進出企業などのサポート業務に従事。その後、フランス・パリで契約コンサルタントとして、アジアと欧州及びアフリカの政府関係機関や企業の戦略プランニング・マーケティング業務を担当。2003 年 8 月に起業し、海外ネットワークを活用したグローバルマーケティング業務に現在も取り組んでいる。経済産業省の JAPAN ブランド育成支援事業や地域資源事業において日本の文化や伝統工芸品などの海外プロモーションや市場調査・販路開拓支援を海外プロデューサーとしても従事した経歴を持つ。IB Projects 代表。

## 鳴神沙紀

1985 年生まれ。 奈良出身

2004 年 関西外国語大学英米語学科入学

2007 年 クイーンズランド工科大学短期留学(1 ヶ月)

2008 年 大学卒業後、藤井寺市立道明寺中学校英語科勤務

2009 年 奈良県立下市中学校英語科勤務

2010 年 香芝市真美ヶ丘東小学校・旭ヶ丘小学校にて ALT として勤務

2011 年 豪州バララット&クラレンドン・カレッジにて日本語補助教員として勤務

2012 年 神戸市立葺合高等学校英語科勤務

## ▼特別ゲストスピーカー

## 松井朔子

1932 年生まれ。 大阪出身

シドニー大学 日本研究科 名誉准教授・文学博士

1961 年 第二次大戦後、オーストラリアの大学で専任講師として正規のコースの日本語を教えた最初の日本人。

当協会発起人古澤峯子氏が 1965 年にオーストラリアで開かれた大学婦人協会世界大会に出席するため初めて訪豪された際に知己を得て以来、古澤先生のクイーンズランド大学で最初の日本人日本語教師としてのお仕事やご帰国後設立された神戸日豪協会の発展と精力的なご活躍に見られる先生の熱狂的なオーストラリアびいきに感銘を受け、研究休暇などで滞日中は黎明期の日豪協会諸活動に貢献。滞日中はまた関西学院大学、甲南大学にて留学生のための現代日本文学コースなどを担当。

ミラー大使の大学時代の恩師。

しばらく前に日本政府の「世界で活躍し『日本』を発信する日本人プロジェクト」というもので、「『国境を越えた情熱』に基づき、日本の強み、魅力、日本的な価値の対外的な発信を通じて『日本』の発信に貢献した」と認められ、国家戦略担当大臣古川元久氏から 9 月 18 日付で感謝状を贈られた。これは近年日本の国際的地位や評価が下がってきている中、日本政府が「日本再生戦略」によって「世界における日本のプレゼンスの強化」を果たす目的で行われているプロジェクトで、各外国プレスに候補者の選定を依頼し、学術、スポーツ、芸能、文化、NGO 活動などの分野から 63 名の候補者が選ばれたもの。その貢献に対する謝意、かつ今後の活躍を期待するという主旨のサンクスレターが送られるもので、オーストラリアからは松井氏以外にファッションデザイナーの五十川明氏、家具のデザイナーの上野二九年氏が選ばれている。

(敬称略)

## パネルディスカッション

### 「虎穴に入らずんば虎子を得ず」

#### ～Nothing Ventured, Nothing Gained～

———— **司会・太田** 最近の学生が海外留学に後ろ向き、若手社員が海外赴任を断るなど、世間でも取り沙汰されていますが、本日のテーマ「虎穴に入らずんば虎子を得ず～Nothing Ventured, Nothing Gained」は私のように10代20代の子供を抱えた親としても、非常に苦しい問題であります。私が所属しているロータリークラブでも奨学金を獲得しているのは、ほとんど他のアジアの国の学生であるという現象を目の当たりにしておりますし、他国の学生の方が日本の学生より優秀だと色々なところで耳に致します。今日はその問題について、教育現場や国際社会でご活躍中の皆様をお迎えしてパネルディスカッションを行ないます。ではお一人ずつ自己紹介・海外体験を聞かせてください。

———— **鳴神** みなさん、こんばんは。鳴神沙紀と申します、今日はよろしくお願ひ致します。私の海外経験は、大学在学中に一ヶ月間オーストラリアに語学研修として行きました。大学生時代は水泳に時間を注ぎ、卒業後は特に海外に行くということもなく、そのまま就職しました。実際の教育現場で二年ほど勤務する中でやはり海外に行きたいなという思いが強くなり、神戸日豪協会にご縁もあってオーストラリアに絶対行きたいという決意を固めました。仕事を辞め、昨年一年間、オーストラリアへ日本語補助教員として行ってきて、そして今に至ります。私は外国語大学出身なので海外に興味を持った友人が非常に多いのですが、一度海外に出た友人たちは皆、フットワークが軽く、日本で就職しても「やっぱりもう一回海外へ行きたい」と職を変えてでも海外に行ったりしています。一方で、実際に外国語大学という環境を経ても日本企業に就職し、一度も海外に出ない人もいます。現状としてはやはり後者の方が多いと思いますが、私と本当に仲のいい友人は海外に出る人が多い傾向があります。

———— **太田** その海外に行く目的は、語学留学やMBA留学、ボランティアなど、どのような形が多いですか。

———— **鳴神** 大学在学中は大学のプログラムで留学する人が多いのですが、卒業後はやはり就職ですね。海外でのインターンシップを使って一年間働いてみて、そこで認められたらもう一年二年と契約を延ばしてもらってワーキングスタイルであったり、あとはボランティアでフランスの城を修復しに行った友人もいました。

———— **太田** ありがとうございます。それでは青木先生、お願いいたします。

———— **青木** みなさん、こんばんは。青木洋一と申します。現在は神戸市立葺合高校で英語を教えております。私と外国語ですが、私は子供のころから外国人が好きで、外国人を見かけたら、あとをついていくような人間で、高校生の時は土日休みには大阪城や京都に行って外国人を案内することを楽しんでおりました。その当時は留

学するという選択肢が一般的でなかったので、何とか英語を喋れるようになりたいという思いでそれを続けていました。大学に入ってからはお金を貯めて、3ヶ月間ヨーロッパでバックパッカーをしたのが海外との初めての出会いです。そのあと大丸百貨店に就職したので、通訳の仕事はしていましたが、ほとんど外国語とは関係ない仕事を3年間続けていました。教員になりたいという夢を持っていましたので、その後、南山大学外国語学部に再入学し、卒業後に教員になりました。一番私に影響を与えたのは、26年前に一年間に神戸市の交換教師としてアメリカの高校で働いたことです。当時の日本は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われ、日本人留学生もたくさん来ていました。その中には問題を抱えている子もたくさんおりましたので、相談相手になってくれと高校から言われ、生活面の指導もしました。それが私にとって大きな影響を与えた経験で、日本に帰ってきてからは葺合高校に勤務することになって、留学生の送り出し・迎いの両方をしていました。

——— **太田** 青木先生ありがとうございました。今、留学生の気質・心構えというか、外国に行くということの捉え方は変化しているのでしょうか？

——— **青木** そうですね、20年前から留学生の担当をしていますが、当時の日本は好景気だったので結構余裕のある家庭が多く、非常に優秀な生徒が海外へ行く機会を得ていました。帰国後は日本と海外の文化・精神を共有できており、双方の良い所・悪いところを見て今までとは違ったもの見方ができる生徒がおりました。しかし最近は経済的な事情もあり、留学生の数は随分減ってしまいました。

もう一点、数年前から学校の中で馴染めなくて海外へ逃げていく子も現れるようになりまして。そういう子は3ヶ月程で帰ってくる人が多いです。葺合高校と姉妹提携しているオーストラリアの学校では最近日本語を勉強する生徒が少なくなっているそうです。学校との関係から日本自体の地盤沈下を感じることがあります。現在は交換留学の制度もなくなりさびしい思いがあります。

——— **太田** どうもありがとうございます。昨年私は当協会が補助教員を派遣している学校を廻ったのですが、青木先生が言われたように、日本語科目を選択する学校がどんどん減ってきています。当協会のような草の根ボランティア団体が10人ほどの日本語補助教員を送り出す一方で、北京では国費を使って何百人もの教員をオーストラリアのエリート校に派遣しますので、どうしても日本語科目が選択されにくくなっている状況があると痛感いたしました。鳴神さん、青木先生には学生の現状についてお聞きしました。和田さんは高校生頃から海外へ行き来しておられるのですよね。

——— **和田** 皆さん、こんにちは、和田直子と申します。私は今38歳なのですが、23年前に中学を卒業してすぐアメリカに留学しました。アメリカに7年、日本で3年間働いて、そのあとはニュージーランドに3年間留学しておりました。留学するきっかけは、中学生の頃に「オレゴンから愛」というテレビ番組を見てオレゴンに興味を抱いたからです。またアメリカの有名大学の様子もテレビで見ることが出来たので、その頃からアメリカの大学に行きたいという憧れが生まれ、まずは中学の夏休みの一ヶ月間、オレゴンにホームステイして、その帰りにサンフランシスコやロサンゼルスを観光したりしました。実際に向こうに行ってみたら、思っていたよりも自分に合う環境だな、と感じたので、日本に戻ってから両親にアメリカへ行きたいと頼み、中学

を出てすぐに留学しました。私は現在グローバルマーケティングの会社を経営していて、2003年に日本に戻ってきてからは、今まで行ったことのない国も対象にして色々なマーケティングの活動をしています。やはり仕事でお会いする日本人の方々は、私と同じように海外で留学されていた方が多いように感じます。その方たちも海外に出て色々な活動をされているので、「ぜひ、自分の子供たちにも同じ体験をさせたい」と思っておられるようですが、お子さん達に薦めても「わざわざ海外に出たくない」と言われるというお話を聞き、心配しておりました。

——— **太田** 和田さん、どうもありがとうございます。和田さんと初めてお会いした当時は25歳という若さでロータリークラブに入っただけで、日本ではありえないことなので大変びっくり致しました。先ほど大使のお話では、日本から海外へ行く留学生数のピークが2004年で8万人を超えていたのが2009,2010年では3割減っているということですが、社会人も同じような問題を抱えているようです。「海外に出たくない・日本で就職したい」と考える大学生は、2001年は29%だったのが2010年は49%と、この9年間で20%も上がっているというショッキングなデータがあります。一方、日本と同じような出生率の韓国からの学生は、学費が年5~10%上がっているにもかかわらず、アメリカを筆頭にヨーロッパ、オーストラリアへの留学数は増えており、中国からのアメリカへの留学は2004年から比べると100%増えています。そのような中で、よし悪しというわけではなく、日本は減る一方という、非常に驚くべき結果を今回知りました。「海外で働きたくない」という人が2人に1人という現状について、和田さんはどう思われますか？

——— **和田** 私の周りは国際的に活動しておられる方が多いので、そういう考えを持った方はあまりいないのですが、ただ実際にいろんな方とお話しする中で、10代20代の方たちは海外へ旅行に行くことに興味がないという人が多いです。私よりも上の世代の方は仕事だけでなく色々なことにハングリー精神があったように感じるのですが、今の若い人はそういったハングリーさを持って活動しなくても、別に問題なく生きていける世代だと思うので、あえて全く文化が違う国に飛び込んでいくというのはあまり考えたくないのかな、という気がします。

——— **太田** どうもありがとうございます。ここまで、3人のお話をお聞きになって、ミラー大使いかかでしょうか。若者が内向きという感覚はおありですか？

——— **ミラー大使** 私は若い人との接触がないのであまりお答えできないかもわかりませんが、1つ2つだけ申し上げたいことがあります。1983年から2003年の20年間は留学生の数は上がっていったのですが、その後は下がっています。どうして減ってきたのかについて話すよりも、どうして20年間、増えていたのかについて議論したほうが良いのではないかと思います。20年間は毎年上がったわけですからその要因を探れば解決策が見つかるかもしれません。私個人としては一番大きな原因は経済だと思います。不景気になってどうやって就職するのかと心配し、留学に対する好奇心を持っていても、「留学は就職する際に評価されないから行かない方が良い」と頭の中で結論付けて、結果行かないという若者が多いと思います。それと、これは言うて良いのかわかりませんが、電車に乗っている若い人たちを見ると、ちゃんと周りの人とコミュニケーションを取っていないのではないかと思います。Twitterやメ

ールだけで済ませてしまう子供が多いですが、日本国内ですらそのようにコミュニケーションができなくなっている状況だからこそ、外国に外国語でコミュニケーションをすることにより高い壁を感じて行きたくない人が多いのではないかと思います。もう1つ言えるのは、海外に関心を持たなくなったのかはわかりませんが、30年前と比べると、最近の日本人は外国人を見かけてもびっくりしないですね。30年前と比べ、今は日本のどこにでも外国人がいるので、海外に行かずとも外国人に慣れきってしまい、好奇心を抱かなくなっているのではないかと思います。私が若いときはどうしてもどうしても外国に行きたくて、行ったこともなければテレビで見ることもなかったので憧れが強かったのですが、今海外へ行きたくない人というのはそういった憧れが少ないのではないかな、という印象を受けます。

——— **太田** どうもありがとうございます。「憧れ」という非常にEmotionalな言葉が出てまいりましたが、鳴神さん、学生の中ではどういう要因が強いと思いますか？

——— **鳴神** そうですね、私は現在、高校で勤務させていただいていますが、実際、大学入試というものが生徒の目の前にありますので、彼らはそこに向かって勉強しているというのが大きいと思います。大学卒業後、就職の際には新卒という肩書きが武器になるという日本社会の現状があるため、どうしても視野が目先のことになってしまうのではないかという気が致します。もちろん受験を控えている彼らは安定を求めているというか、チャレンジしないという風に感じますので、そういったところから海外に行く人が減っているのではないかと思います。

——— **太田** ありがとうございます。先ほど大使の方から、企業が新卒を面接する際にあまり国際コミュニケーション能力を重視していないのではないかという言葉がありましたけれども、企業が学生に対し一番重視しているものとはという2010年の調査で、「熱意・意欲・行動力」が2位、「協調性」が3位、「論理的思考」が4位、以下5位、6位と続き、「国際コミュニケーション能力」は12位となっています。このような状況について青木先生いかがでしょうか。

——— **青木** 今のお話に出た「海外に行きたくない若者が多い」ってことですが、ウチの生徒を見ると、世界各国ある中でやっぱり最近希望が減っているのは中国なんですね。テレビで最近の反日の報道、たとえば日本車がひっくり返されたりしているのを目の当たりにすると、僕でもちょっと遠慮したいなと思ってしまいます。高校生たちも、こないだ中国語学科を受けたのですが、去年は七十数名いたのが、今年は四十数名しか受けませんでした。中国に行く可能性があることを考えると、自分が向こうで大変な目に遭うのではと心配してしまうようです。他に例えば、インドでも、スズキ自動車が現地の労働者と問題になるなど、ネガティブな情報や人間関係の難しさが、テレビを通してどんどん入ってきますので、それを見て、若い人はコミュニケーションに自信をなくし、自分では無理だなあと考えて諦めるのではないのでしょうか。

——— **太田** どうもありがとうございます。ここで面白い数字があるのでご紹介します。1992年、今から20年前ですが、日本の18才人口は205万人でした。そして、現在はどれくらいだと思いますか？2010年の18才人口は122万人です。日本には、留学する人数が減っているという事実と、子供の数自体が激減しているという

事実も存在するのです。これを見ると留学数は3割減だが、子供の数が4割減っているのだから、留学の比率は減少していないではないかというご意見もあるかと思いますが。しかし、日本とほぼ同じか、少し低い出生率の韓国から2010年にアメリカへ正規留学している方の数は7万3000人で、日本からは2万1000人という数字を見れば、韓国と日本の人口差も考えると、非常に落ち込んでいると捉えられるのではないのでしょうか。もちろん、オーストラリアも含め、アメリカ以外の国を留学先に選ぶ人も増えてきているのでアメリカの数字だけに着眼するのも、いかがなものかと思いますが。以上、学生の状況についてご紹介しました。では、現在の20~30代の若い社会人について、様々な外的要因、内的要因などいかがでしょうか？

——— **和田** そうですね、私、昨日バンコクの出張から帰ってまいりましたが、仕事でお会いしたタイの工業省の局長さんは、お嬢さんが北海道に留学されているとおっしゃっていました。先ほど、ミラー大使からもあったように、日本に対する憧れというものが、タイの若い人たちにはあるようです。なので、経済的に豊かな方は日本に留学したいと声を揃えて言われます。

——— **鳴神** 私は実際にこのNPO法人である神戸日豪協会を通じて実際に1年間行ってきましたので、たくさんの若い人たちにオーストラリアに行って欲しいなあという気持ちを強く持っています。そこで、既存の活動を続けつつ、何か新しい活動も始められたらいいなあと思います。私は教育現場で働いておりますので、何かそういったところで取り組みをいっしょに出来たらと考えます。海外でのリスクへの懸念が先に立ち、憧れというものを抱けなくなってしまっていることが原因だと思うので、今から育てていく子どもたちに海外で働くことへの憧れ、海外で学ぶことの憧れを育てられたらなあと思いますし、それを日豪協会で実現できたらなあと思っています。具体的なアイデアはなかなか出てこないのですが。

——— **太田** 先日、ECCの海外留学担当の方に話を伺ったのですが、もしかすると、今からの2年間は2010年から反転して、海外渡航数が増える、それも留学ではなく、インターンシップとしての海外体験が増えるのではないかとのことでした。私は個人的に毎週のように大学生と会う機会があるのですが、インターンシップを海外で経験したい、海外で就労体験がしたい、という学生に出会うこともあります。正確な数字はわかりませんが、「英語を」学ぶのではなく「英語で」働ける自分を目指し、アジアの学生に負けたくないとする若者は増えているような気がします。手元にあるのは2010年までの資料なので、ひよっとすると、2012年、2013年の若者は少し変化してきているのかもしれませんが。周りの大人からは「何を考えているかわからない、常に受身に見える」などと揶揄される若い世代ですが、外からはそう見えても、中ではやる気に火がついているのではと、思ったりもします。留学の数字には含まれませんが、彼らの中には短期間でも長期間でもとにかく海外に行き、現地でボランティアをしている人もいます。

——— **青木** いちばん、心に残っているのは、20年前、生徒がオーストラリアに1年間行かせてもらい、向こうからも素晴らしい生徒が1年間来てもらって、他の生徒にもとてもいい影響をもらったことです。今はオーストラリアから1年間という子はいないし、来たとしても年末から2、3週間いて帰るくらいなので、ぜひ大使や

皆さんに協力していただいて、長期の交換留学を実現させたいです。行きたいと希望する生徒もいますし、費用の面でも交換留学はとても助かります。以前は日豪協会の集まりに行くと、交換留学で来ている留学生が15人程いて、華やかでしたし、楽しかったです。ぜひ協力していただき、以前のような長期の交換留学を復活させたいです。もうひとつは、ボランティアでもシルバーの方々が元気ですので、同じ留学でもシルバーの人の留学とか、オーストラリアでボランティア活動をするとか、何かできるのではないかと思います。私は今61才ですが、チャンスがあったら行ってみたいなあと思います。会社を退職してもまだまだ活躍できる方はたくさんいらっしゃるので、オーストラリアで日本語を教えるとか、時代に合わせて、そういう試みもいいのではないのでしょうか？

——— **太田** ありがとうございます。ご存知の方もおいででしょうが、オーストラリアの **University For Third Age** はもともとフランスが発祥と聞いておまして、現役を終えられた50代から70代に交換訪問していただき経験を交換し合うというプログラムです。実は神戸日豪協会からも一度だけ、10名程のシルバー世代の方にブリスベンへ行っていただいたことがあります。非常に皆さん、好奇心旺盛でいらして、よいプログラムだなあと思い、次はブリスベンから10名のオーストラリア人シルバー世代の方々にホームステイに来ていただこうと企画しましたら、受け入れ側の神戸の方々から「私ら、よう面倒みいひん」と言われ、残念ながら終わってしまった経緯がございます。でも、今のご意見にありましたように、子供たちだけでなく、シルバー世代に目を向けるのもいいですね。そうしたシルバーの世代の方々が受けた恩を次世代へ送る“Pay Forward”（恩返し、恩おくり）や海外体験に憧れを抱くお手伝いを、日豪協会ができればいいなあと思います。

——— **和田** 私は日本の社会というのは言葉として英語ができれば、国際人という評価を受けるようですが、実際に海外で取引、業務サポートをしていると、その国の文化が感覚的に身につけていないと、言葉だけ出来ても、実際に交渉成立しにくかったり、トラブルになったり、商談成立したとしても、長いお付き合いができなかったりするケースが多いので、言葉を学ぶだけでなく、その国に飛び込んで、しっかり文化や習慣などを身につけるといって提供できるような活動をしていただけたらと思います。もう一点は、企業さんにも、「言葉だけ出来たらいい」のではないという事実を伝えていっていただければと思います。

——— **太田** ありがとうございます。大使、ここまでいかがでしょうか。

——— **ミラー大使** 私はいつもスピーチやあいさつで申し上げているのですが、教育や留学、観光などの人的交流がいちばん大事と思っています。そういう交流があってこそ文化交換がうまくいっていると思います。ある意味で日豪関係の「重し」になっているのではないかと思います。そういう人的交流を支えるのに、心、ボランティア精神だけじゃなくて予算も必要なわけですね。皆さんは予算という言葉をお使いにならなかったですが、多分、頭の中でそれを考えていらっしゃるのではないかと思います（笑）私は賛成です。ある程度、財源がなければ何もできないというのは事実だとわかっています。私が基調講演の中で白書の話をしたのですが、白書には予算があるので、そういう留学の枠組みなどを作ればいいのか、と私は思ってお

ります。一方で、財政の健全化、なかなか政府から予算が出ないという現実もあります。日本とちがって累積赤字はありませんが、だからこそ、財政の健全化が重視されています。が、白書で予算もついたので、今日の話を参考にして検討します。

もうひとつ、日本に対しての期待ですが、政府レベルでは政治家、リーダーの方には日本は自信をもって国際社会で活躍していただきたいと思っております。民主国家で、オーストラリアと同じ価値観を持った国ですので世界で活躍してほしいです。また個人レベルでも日本の皆さんに申し上げたいのは、この国はいい国です。日本の皆さんは謙遜をされるので、なかなかそうおっしゃいませんが、それは日本のパワーにも繋がると思います。もうひとつ、日本だけじゃなくオーストラリアにも向けても言いたいことがあります。オーストラリアにはギャップイヤーと言って一年間、外国に行く制度があり、これは継続してほしいと思いますが、それとは別に問題もあって、例えばバリ島にいても、自分がインドネシアにいるということ自体を知らない人がいたりします。オーストラリアにも、実際に外国に行っても、頭の中では外国に行っていない人もいるので、海外をもっと意識してほしい、日本だけじゃなくオーストラリアの若者も頑張してほしいと思います。

——— **太田** 予算の話も含め、ありがたいお話をありがとうございました。

——— **ミラー大使** 最後は松井先生にひとことお願いしましょうか・・・

——— **松井** 先ほどから何度もワタシの名前がでまして、一体どんな人なのかとお思いの方もおられたでしょう、松井でございます。私は1961年に日本語の文学をシドニー大学で教えるためオーストラリアに参りました。その時からずっと日本や、シドニー大学で留学生も見てきたわけです。12年ほど前に退職しましたが、現在もシドニー大学に籍を置いて名誉研究員という形で大学の図書館を使ったり、コンピューターを使ったり、その他もろもろ、無料でできることは、車を停めることから全部やらせてもらっております（笑）去年までは年に2回くらい日本に戻ってきて、一年の半分ずつを日本とオーストラリアで過ごしております。今日、色々お話を伺っていて、当面の問題である「日本の若者が内向き」というのは、私も非常に感じます。また、私の同僚でオーストラリアから日本の大学へ短期間、講義をしに来たインド人社会学者の女性がいるのですが、やはり日本の学生の反応が、悪く言うと「にぶい」と言っています。インドの話をして、オーストラリアの話をして、熱く反論しない、ああそうか・・・という程度で、その後、いっしょに学生と食事したりしても、自分は外国に行きたくないとはっきり言うそうです。では、将来どうするのかと聞くと、家業を継ぐとか言って殆ど興味を示してくれなかったと言います。

私がシドニー大学で見ている限り、海外に目を向けている日本の若者もいることはいます。さっき和田さんは中学卒業から留学とおっしゃいましたが、オーストラリアの高校生も1年間、日本で勉強し、帰国後はシドニー大学でさらに日本語を学び、日本語を使って日本と関係ある仕事に活かすという人は非常に多いし、みんな成績もとても優秀で、まあ、ミラー大使はいい例ですけど、そういう人が何人もいました。私は41年教えたんですが、最初の15年間くらいには数は少ないものの大変優秀な人がおりました。ところが、オーストラリアの大学も変わりまして、これは世界中の現象ですし、日本も一緒ですが、「大量生産」、「レベルは落ちる」。もちろん、国民全体のレベルは上がっているといえるのですが、その人次第で出来不出来のばらつきが

激しい。日本もその弊害を受けているのではないかと思います。日本の大学を卒業したあと、オーストラリアの大学で勉強したいからとやって来る人は何人もいます。そういう人たちの大きな問題は、日本の社会がその人たちをどう受け入れるかということなのです。それから、小さな問題は「お金がかかる」ということです。二つとも、先ほどいろんな方がおっしゃっていますが、例えば、ミラー大使が学生の頃、授業料がタダだったでしょ？オーストラリア人だけじゃなく日本人もタダだったんですね。今はまったく状況が変わってしまったんです。今、オーストラリアでは、留学生は経済的にも大変なんです。それに加え、せっかく高いお金を使って、オーストラリアに留学に来てくれたとしても、帰国後、日本の社会が受け入れてくれないという、したいことが出来ないとなれば、誰だって二の足を踏むと思うんです。よほど、よほど行きたい人でない限り行かない、そしてそんな人の数が少ない——それが問題です。では、よほど行きたいという人を増やすにはどうしたらいいか、それは、日本の受け入れ側、事業や会社側の意識が変わらないといけないというのが一つ、もうひとつは極端にいうと、教育そのものが変わらないとダメだと思います。日本の教育は他と比べると全く違いますね。やっぱり受験というのが大きな問題です。小学校からいい小学校に行く、中学からいい中学に行く、高校からいい高校に行き、いい大学に行く。いくつもの段階でかわいそうな子供たちは押さえつけられる、これが問題だと思います。抽象論はアカンと言われるかもしれませんが、教育関係の方が第一に率先してもう少し、特に小学校からの教育に力を入れなくてははいけません。いじめだってそうですよね。話がそれますが、こんなにいじめがはびこっているというのは日本の教育者は恥ずかしいと思わないんだろうかと疑問です。教育というのは何をするのか、いい点をとっていい大学にやるというのが良い教育のように思われていますが、それは決してそうではありません。人間をつくるのが良い教育だと思う。その人間をつくる過程において、例えば和田さんのようにテレビの番組を見て、海外を目指す子供もいます。でもテレビの番組を見なくても、学校でも、そう思えるように、子供を仕向けてやることは私は教育だと思います。特に日本の将来を考えたら、教育のあり方というのは小学校から変わっていかないとご期待の成果はあがらないと思います。つまりは、教育の「制度」と、それから同様に「態度」、企業や社会側の「態度」がもう少し一人一人の個人を重んじる態度が必要だと思います。

話はちょっと具体的なことになりますけど、オーストラリアでは先ほどミラー大使がおっしゃったギラード首相の白書の前から、ずっと小学生からアジアの言語に目を向けさせることをやっている。20年前には中学1年生から、たくさんの外国語を選択して学べるようになっていました。移民の生徒が来たら、その国の言語も入っているくらいの選択肢の多さでした。その中で4つのアジアの言語が優先的に扱われていたということです。ロシアの近隣の国から来た生徒がいましたが、自国の言葉を勉強しようと思ったら、オーストラリアの学校で学べると言っていました。日本はどうですか？韓国のような近い国のハングルでさえ勉強することができません。日本の教育もオーストラリアみたいに小学校からいろんな外国語に触れる機会を持てばいいんです。まあ、日本も小学校から英語をすることになり、やらないよりいいでしょうけど、英語だけではいけません。もちろん、小6や中1が一年、勉強したくらいでは、語学としては何にもなりません。が、それはその国に対する理解、文化への興味に繋がるのです。日本語を勉強して焼き鳥パーティーでもよし、そういうのを日本でどうしてやれないのかと思います。成績は、上級生の方であげていけばいいわけですからね。結局、

下（小学生）からも上（大学生）からも変えていかなきゃいけない結論になってしまいました。

もうひとつ、オーストラリアに留学している人の問題で、先ほど授業料のことを申し上げましたけれども、もう少し、オーストラリア政府が、留学生の授業料の負担を軽くしてくれると日本人が行きやすくなるかなと思います。でも、そしたら、さっきインドや中国から何万人という留学生が来ているという話がありました。もっと増えますね。特にインドからの留学生の話を見てみると、はじめから居残りを画策しているわけです。オーストラリアに永住権をもらうつもりで来ている。日本人はどうか？日本人は殆ど、帰りますね。だから、少し優遇してあげましょうねという政策に期待したいと思います。「自分の国を否定して留学して来て、そのまま住民になりたい人」と、「自分の国をよくしようと思って留学に来ている人」というのは違うと思います。そのあたりが、なんとかなればいいと思います。

最初に申し上げようと思ってすぐ本題に入ってしまったのですが、神戸日豪協会創立40周年、私はそれより前に古澤先生を存じ上げており、創立のいきさつなど様々なことを知っています。あれから40周年を迎えられたことを心からお祝いしたいと思って、今日ここに来ました。

——— 太田 松井先生、お生まれが1932年、来週は80才のお誕生日をお迎えるそうでおめでとうございます（拍手）本日は皆様、ありがとうございました。

この模様は翌11/25付の神戸新聞・朝刊にて紹介されました。～

# 神戸

火事や事故の速報・写真・映像提供、身近な話題、生活情報をご連絡ください。

## ■ 本社 社会部

〒650-8571  
神戸市中央区東川崎町1-5-7  
TEL:078-362-7040  
FAX:078-360-5501  
e-mail:kobe-ban@kobe-np.co.jp

## ■ 北神支局

TEL:078-741-5814

読者サポートセンター（月～土）  
TEL:078-362-7056（10:00～17:30）

### 【中央区】

日本とオーストラリアの交流促進に取組むNPO法人「神戸日豪協会」が24日、設立40周年の記念シンポジウムを中央区のANAクラウンプラザホテル神戸で開いた。ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使を

豪の友好団体では東京に



海外留学の経験や重要性について語り合うパネリストら＝中央区北野町1

## 日豪の絆紡いで40年 NPO記念シンポに100人

次いで2番目に古く、交した。換留学や日本語補助教員の派遣に取組んでいる。会員は約130人。シンポジウムでは、ミラー大使が流ちょうな日本語で講演。同国にとってはアジア外交が重要と述べ、「両国の発展にはさらなる連携が必要」と

留学経験者4人によるパネルディスカッションもあり「海外で学ぶ若者が増えれば日本の成長につながる」「若者の内向き傾向は、コミュニケーション不足が原因」などの意見が出された。（小西隆久）



全国日豪協会連合会神戸大会 懇親会  
神戸日豪協会創立40周年記念パーティ



- 開会あいさつ 太田 敏一 神戸日豪協会会長
- 主賓ご祝辞 ブルース・ミラー様 駐日オーストラリア大使
- ご来賓ご祝辞 足立 英雄様 全国日豪協会連合会副会長  
名古屋日豪協会副会長
- 乾杯 クリストファー・リース様 在大阪オーストラリア総領事
- ご来賓ご祝辞 マーガレット・ラックマン様 クィーンズランド州日豪協会副会長
- スピーチ 赤保 正文 神戸日豪協会監事
- スライドショー上映 「日本語補助教員派遣プログラムのご紹介」
- ギター演奏 ザ・とーちゃんズ
- 抽選会
- ベストドレッサー賞発表 シンディ・リネバーグ 神戸日豪協会副会長
- 閉会あいさつ 伊藤紀美子 神戸日豪協会副会長

# 全国日豪協会連合会神戸大会 懇親会

## 神戸日豪協会創立40周年記念パーティ

2012. 11. 24 18:30より  
ANAクラウンプラザ神戸  
10F Ball Roomにて



18:30 太田敏一会長あいさつ



18:35 ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使閣下よりご祝辞



18:40 全国日豪協会連合会  
足立英雄副会長よりご祝辞



18:45 乾杯のご発声、クリス  
トファー・リース在大阪総領事



19:10 ブリスベン豪日協会  
マーガレット・ラックマン副会長



19:20 創立から40年を  
振り返り赤保正文氏



19:25 派遣教員スライドショー  
伊藤みなみさん



世界中から元・派遣教員たちが  
エールを送ってくれました



見事な司会！2011 年度補助教員  
松井健太朗さんと鳴神沙紀さん



19：30 頑張ってきます！  
2013 年派遣補助教員を代表  
して原田裕基さん



20：00 豪華賞品の発表は  
2011 年派遣教員前田梨花さんと  
大澤奈巳青年部長



ミラー大使と 2013 年度派遣予定の日本語補助教員  
の皆さん。この写真は大使の公式ツイッターに  
載せていただきました。左から原田くん、林さん、  
藤田さん、橋本くん、ミラー大使、楠田さん、石  
井さん、大森さん（残念ながら松尾さんは欠席）



19：40 ザ・とーちゃんズのお二人と  
I Still Call Australia Home を熱唱  
高校留学生のエレンさん&ベンさんと  
飛び入り？ブレンダン・ボルトン二等書記官



20:20 ベストドレッサー賞発表  
シンディ・リネバグ副会長

ベストドレッサーは  
ワタシ(笑)



シンガポールへご栄転の  
クリストファー・リース総領事へ  
感謝をこめてプレゼントを渡す  
太田会長



20:30  
伊藤紀美子副会長による閉会挨拶

くだおれ人形・・・？  
ホラホラ、僕を  
思い出しやすいでしょ？



## お祝いメール



### ☆水島 亜也子（ユーロア在住）地元小学校にて日本語教師としてご活躍中

この度は神戸日豪協会創立40周年おめでとうございます。私と家族にとって日本とオーストラリアの両方が自分達の祖国ですが、神戸日豪協会そして古澤先生との出会いがなかったならば、今の私の人生も違ったものになっていたと思います。40年の歴史を重ねてこられた中には色々な方々の努力がおありだったことと思います。先輩方のオーストラリアに対する情熱と愛情を受け継ぎ、渡豪をただの観光旅行に終わらせたくないと心から思ってから20年以上が経ちました。まさに「オーストラリアに恋をした」といった感じでした。そのように考えさせて頂いたことに本当に感謝しております。ただ今、ビクトリア州の田舎町に在住しながら、日本人でありオーストラリア人である子供2人を育て、日本語教師として日豪の架け橋になるよう努力しております。子供たちも生徒達も皆、日本が大好きです。生徒達は文通を通して日本のお友達を作りつつあります。そんな小さな交流が続いて友情が生まれ、将来お互いの国の良い点を学びあってくれればと願っています。古澤先生が空から応援して下さいているような気がします。少しでも日豪交流に力になれますよう頑張ります。会員の皆様のご健勝をお祈りしております。



### ☆遠藤 マリ（フランス在住） この度は神戸日豪協会創立40周年おめで

とうございます。わずかな期間でしたが、古澤先生の熱き思いに溢れた神戸日豪協会、先生の下で行事活動に関与できました事は何にも代え難い貴重な経験、思い出です。世代が変わっても古澤先生の志が維持され、こうして40周年を迎えられた事を心よりお祝い申し上げます。神戸日豪協会が益々ご発展されます様、そして豪日交流が多方面に亘り、さらに充実されます様、陰ながら応援しております。



### ☆三森 すみ代

神戸日豪協会創立40周年おめでとうございます。協会の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。当日は出席を予定しておりましたが、仕事の都合上帰国が延期になりました。全国日豪協会連合会、記念シンポジウム、そして記念パーティのご成功をシドニーよりお祈り申し上げます。



### ☆奥村（浅野） 広樹

神戸日豪協会設立40周年おめでとうございます。1998年度日本語補助教員としてCCGSに派遣していただきました。当時は3校だけでしたが、現在は8校に派遣されているようですね。私は現在、滋賀県草津市で小学校5年生を担当しています。毎年のように、自分のクラスの子供達には私のオーストラリアでの体験を話し、オーストラリアやオーストラリアの人達の素晴らしさを伝えていきますので、ほとんどの児童がオーストラリア・ファンになっていきます。なかなか神戸まで行くことはできませんが、自分の仕事の中で、直接オーストラリアの素晴らしさを伝える機会があることを嬉しく思っています。皆様におかれましては、いつまでもご健康でご活躍されることをお祈りいたしております。



### ☆服部 清海（オーストラリア在住）

神戸日豪協会創立40周年を心からお祝い申し上げます。創立以来、半世紀近くに亘って日豪交流と相互理解に尽くされた皆様のご努力に敬意を表します。今後も異文化間の相互理解、ひいては世界平和に貢献されることを祈ります。

## 神戸日豪協会 40年の歩み

- 1972年 神戸日豪協会発足 阪本勝 元兵庫県知事を会長に兼松江商 神戸  
営業所 2階に事務所開設 事務局長に古澤峰子氏 当初会員 180名  
でスタート (1月26日)
- 1973年 シドニー・ブリスベン親善旅行 (12/15~1/3)
- 1974年 ブリスベン・プロジェクト (QLD大学)、日本語補助教員派遣プロ  
グラム (Geelong Grammar School Timbertop 校 マンスフィールド,  
VIC) 開始
- 1978年 高校生交換留学プログラム 開始
- 1979年 事務所 移転 (→現在地 田嶋ビルへ) (5月25日)
- 1980年 エセル・メイ・パンションさん (モンティさん) を日本へ招待
- 1981年 創立10周年記念親善旅行 (7/24~8/5)  
記念誌「支えられて」発行
- 1983年 小学生の日豪交流スタディ・ツアー派遣開始  
(野尻小学校<波賀町>、登美丘東小学校<堺市>、神大付属  
住吉小学校<神戸市>→アイアンサイド小学校 (ブリスベン市))
- 1984年 小学生日豪交流受け入れ開始  
(アイアンサイド小学校来日→堺市、波賀町、神戸市)
- 1985年 神戸市・ブリスベン市姉妹都市提携調印式 (7月16日)
- 1986年 創立15周年記念訪豪親善ツアー (9/13~25)
- 1987年 古澤峰子氏に豪政府よりOAMメダル授与。日本人で4人目、女性  
で初めて  
「モンティ 100年の青春—人生は未来を秘めて」出版
- 1989年 Christ Church Grammar School(パース,WA)に日本語補助教員派遣  
開始
- 1991年 創立20周年記念訪豪ツアー (7/18~31)
- 1992年 兵庫県自然教室オーストラリア研修旅行 (7/29~8/9)  
Geelong Grammar School Corio 校 (ジーロン,VIC) に日本語補助  
教員派遣開始
- 1993年 兵庫県自然教室オーストラリア研修旅行 (7/30~8/11)
- 1994年 カウラ・ブリスベン友好親善旅行 (7/28~8/8)
- 1995年 阪神淡路大震災 — 事務所一時閉鎖 —  
オーストラリア派遣団 (8/17~31 被災学生、一般、ブリスベン・  
プロジェクト<最終>)
- 1996年 豪日友好100周年記念大会 (於:ブリスベン)
- 1997年 創立25周年記念の集い (於:神戸商工貿易センタービル)  
「神戸日豪協会25年の歩み—心の懸け橋」をサンTVにて放映
- 1998年 日豪合同シンポジウム 「21世紀を担う若者は異文化交流から育つ」  
(於:ひょうご国際プラザ)

- 1999年 West Morton Anglican College (イプスウィッチ、QLD) に日本語補助教員派遣開始 (～2001年最終)
- 2000年 特定非営利活動法人として兵庫県より認証書を交付される
- 2001年 古澤峰子氏に豪政府よりOM勲章授与 (2度の叙勲は日本人初)
- 2002年 創立30周年記念事業として高校生夏季オーストラリア英語研修プログラム開始
- 2003年 オーストラリア文化セミナー 「日本人のオーストラリア移民史」  
講師：ノーリン・ジョーンズ氏 (於：神戸市勤労会館)  
Barallat & Clarendon College (バララット、VIC)、Moley HS (パース、WA ～2005年)に日本語補助教員派遣開始
- 2004年 神戸日豪協会青年部再スタート  
Peace Lutheran College(ケアンズ・QLD)、Narrabundah College (キャンベラ・ACT ～2011年最終)に日本語補助教員派遣開始
- 2005年 21世紀万博「愛・地球博」の開催を記念し、博覧会場を出発し広島まで600<sup>km</sup>を日豪の自転車愛好家が走破  
Loreto College(バララット、VIC)に日本語補助教員派遣開始  
Thomas Carr College(メルボルン、VIC)に日本語補助教員派遣
- 2006年 日豪交流年(「日豪友好基本条約」署名30周年、日本在外公館開設110周年、豪日交流基金創設30周年)  
Westbourne Grammar School(メルボルン、VIC)に日本語補助教員派遣開始 (～2011年最終)
- 2007年 神戸市立森林植物園内の「ブリスベンの森」にブリスベン市の市議会議長らが古代木「ジュラシック・ツリー」を植樹
- 2008年 オーストラリア外務大臣ステイーブン・スミス氏一行とクラウン・プラザ新神戸で会長、副会長、理事らが会談(6月27日)
- 2009年 ビクトリア州で山火事猛威を振るう(Timbertop校付近)
- 2010年 古澤峰子先生100歳長寿のお祝いの会(1月9日)  
神戸市・ブリスベン市姉妹都市提携25周年記念交流団 来神
- 2011年 ブリスベン市洪水に見舞われる(1月13日)  
東北関東大震災(3月11日)  
古澤峰子氏逝去(6月26日 享年101歳)  
「WALLABY」メール配信開始(9月号より)  
The Cathedral School(タウンズビル、QLD)に日本語補助教員派遣開始
- 2012年 古澤峰子先生を偲ぶ会(1月28日)  
全国日豪協会連合会総会神戸大会・神戸日豪協会創立40周年記念パーティ(11月24日、於：ANAクラウン・プラザ神戸)

## 日豪 一心の懸け橋めざして

### 神戸日豪協会創立 40 周年

神戸日豪協会創立 40 周年を祝う記念行事が、全国日豪協会連合会神戸大会も兼ねて 11 月 24 日（土）神戸市中央区の ANA クラウンプラザホテル神戸で盛大に開催された。

昭和 47 年（1972 年）1 月、古澤峰子先生らが中心になって、日豪の心の懸け橋を目指し、東京に次いで 2 番目の神戸日豪協会が呱呱の声をあげて 40 年。現在では 30 を超える全国の協会でも、最も目覚しい活躍を続けている協会といわれるまでに発展してきた。生前から「次は 40 周年の記念パーティーなのね。全国と一緒に祝いましょうよ」といわれていた古澤先生も、この盛会ぶりを喜んでくれるに違いない。

神戸日豪協会にとって最も幸運なことには、東京からお祝いに駆けつけてくれた駐日オーストラリア大使ブルース・ミラー氏が当協会の太田会長の旧知であり、さらに古澤先生の教えも受けていることだ。大使は 17 歳の春、国際交流基金で来日し古澤先生の指導を受けながら 2 週間神戸に滞在し、20 歳のシドニー大学在学中には留学生として関西学院大学に学び、太田会長宅にホームステイしていたのである。現在のオーストラリア大使が日豪協会の会長と同窓生で、しかもホストファミリーだったというのはきわめて珍しく、大使はシンポジウムの記念講演を始め、その後の討議や挨拶もすべて流暢な日本語で行った。

記念行事は全国日豪協会連合会総会、記念シンポジウム、祝賀パーティーと 3 部に分かれていたが、一番注目されたのは大使が講師とパネリストを務める記念シンポジウムであった。大使は日豪両国にとってアジア外交が今ほど重要な時はない。両国の発展のために更なる日豪の交流、連携が必要だと力説された。またパネリストたちも留学する学生が激減したことや、自分の努力で運命を切り開くという気迫が若者に欠如していることを憂いた。そして、こうした閉塞感の溢れる時代だからこそ、国際交流の重要性を改めて見直すべきだと提案した。

当日のハイライトともいえるべき祝賀パーティーには 120 名を越す参加者があり、たいへん盛会だった。映像による日本語補助教員派遣プロジェクトの紹介や、近く渡豪する 8 名の来年度生の紹介などからギター演奏、豪華賞品の当たる抽選会、当日のベストドレッサー選びなどのプログラムで盛り上がった。なお当日の様子は翌日の神戸新聞に写真入りで紹介されている。

ところで、このような立派な記念行事が開催できたのも全国各地から参加いただいた役員方をはじめ、日頃から何かと当協会の活動にご尽力いただいている会員の皆さん方のご協力の賜物である。改めて深く謝意を表したい。

日 下 徳 一 （副会長・40 周年記念大会実行委員長）



## 神戸日豪協会設立 40 周年記念

大会長	太田 敏一	神戸日豪協会会長
副大会長	伊藤紀美子	神戸日豪協会副会長
実行委員会長	日下 徳一	神戸日豪協会副会長
実行委員会副委員長	シンディ・リネバーグ	神戸日豪協会副会長
実行委員会副委員長	谷内 豊	神戸日豪協会副会長
総務長	川鍋 彰男	神戸日豪協会理事
副総務長	吉田 昭裕	神戸日豪協会理事
祝賀会委員長	藤岡 滋	神戸日豪協会理事
祝賀会副委員長	堀田 寛晶	神戸日豪協会理事
祝賀会副委員長	久野 靖洋	神戸日豪協会理事
書記	渡利由紀子	神戸日豪協会事務局
渉外	堀田真紀子	神戸日豪協会事務局
庶務	穂谷稚佳子	神戸日豪協会事務局

発行：2013年1月20日  
特定非営利活動法人 神戸日豪協会  
〒651-0084 神戸市中央区磯辺通 4-2-8 KIMM ビル7階  
Kobe Japan-Australia Society ☎078(252)0576 FAX 078(252)0347  
事務所：月～金（10:00～15:00）e-mail：[kjas@hop.ocn.ne.jp](mailto:kjas@hop.ocn.ne.jp)